



Title	<書評>大國真希著『太宰治 調律された文学』
Author(s)	野本, 聡
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 136-137
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57176
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大國眞希著

『太宰治 調律された文学』

野本 聡

職場からの帰途、よく晴れた日には玉川上水沿いをそぞろ歩くことがある。井の頭公園を抜け三鷹駅近く、勿論そこ特定する標などはないのだが、太宰治が入水したであろう場所でも立ちどまり、川面をそつと覗き込んでしまう。果たしてここで命を絶つことなどできたのだろうかと思うほどに今はささやか過ぎる流れが陽に煌きながらあるばかりだ。溜まりつつゆるゆると流れゆく水に映り込む青空と、かそけき音と…。いや、音など実は傍らを走り抜ける自動車の雑音にかき消されていたはずである。しかし、そこに〈音〉を感覚してしまふ心性の体験の方が重要なだろう。決して太宰文学の熱心な読者とは言えない書評子が大國眞希著『太宰治 調律された文学』にめぐりあう機縁はあの場所に佇んでいた時、密やかに結ばれ始めていたのかもしれない。

大國はこの著作の「おわりに」で「太宰治の作品を対象にして、〈音〉を考えた時に囚われる、青空とそれを写す水溜りの重なりから〈音〉がするという感覚もまた、その時に渦巻いた感覚に含まれており、〈音〉に対しての問題意識や研究姿勢は本書

でも共通して貫かれている」と記している。「忘れてはならないことは」と大國は〈音〉について次のように注意深くまとめている。「藝術の據りどころ」となるべき「青空」と「水溜り」の「二重の景色」に閉じ込められているのは、「音楽」ではなく、いまだ音楽にならない「音楽性」の言葉である点だ。そこは「全くのサイレント」なのだ。そのような〈音〉を太宰作品の中に聞き取ることの重要性を本書によって明らかにできたのではないか（「結 太宰文学と〈音〉」と。大國は太宰の小説空間に響く〈音〉、つまりその無音の音響性は重層的に「調律されている」（「序 太宰文学におけるスペクトル」と述べ、「水たまりから生み出される、——「世界——内——音」としての音ではなくて——「世界——起——音」としての〈音〉に耳をすませ」「太宰作品の根底を支える〈無音〉を聴き取るという困難な研究をこの著作の中で呈示し、また太宰文学を読む者に新たな気付きの読解を促している。

具体的な作品の分析を見てみよう。「序 太宰文学におけるスペクトル」と「Ⅱ 信仰と音」における「鳥の聲」と銀貨——「駆込み訴へ」で焦点となるのは「駆込み訴へ」の末尾近くに描かれている「鳥の聲の正体」ある。大國は「揺れ動いているユダの語り」に「何がしかの良心」があるからこそ「〈鳥〉の正体を「私」は見る事が出来ない」のだが「銀三十」に「鳥の聲」が吸収されたかのように、ユダの語りの声の二重性はきれいに消失し、ひとつに重なる」と分析する。この

主体の乗っ取られ方が「心底、恐ろしい」のだと。やや込み入った分析で書評子には難解であるのだが、「世界——起——音」としての〈鳥の聲〉が他でもない銀貨によって〈無音〉化される時、「イスカリオテのユダ」という「のつとられた」「主体」が立ち上がる。だからこそ読者はまず「世界——起——音」としての〈鳥の聲〉に耳を澄ましていなければならぬのだ。大國はこのように述べたいのだろうか。

もう一つ、大國自身が「その音によって、適切的に物語に意味を持たせたり、物語が調律されたりすることはない」事例としてあげている「ダス・ゲマイネ」の中の「ライト。爆音。星。葉。信號。風。あつ！」の部分に対する分析と解釈を見ておこう（「結 太宰文学と〈音〉」。大國は「主体」が瓦解する（佐野が死ぬ）瞬間を捉えた、「詩」的な言葉の連なり」とし、続けて「言葉の意味性が、言葉の物質性へと転換する筆致」と述べる。確かに大國が述べるようにここには「太宰的術語（葉）」もしっかり描き込まれている」が、意味性を解かれた語句の羅列はアヴアンギャルド詩を彷彿とさせないこともない。だからこそ、というべきか、この調律をすり抜ける（あるいは抗う？）ノイズとしての「爆音」の、その物質性をテクストの中でどう可能性として評価していくかも今後の課題となるように思った。勿論、大國はこの著作の中で繰り返し太宰文学と広く他の作家の作品との関連も仄めかしている。例えば「序」においても早速「マンデリンを奏でる（きたる弾くきたる弾く）萩原朔

太郎、楽譜を片手に口笛で音を起こしながら歩く梶井基次郎、蓄音機のラッパの中に頭を突っ込むようにしながら旋律の流れに任せて跳ね回り、セロを運ぶ宮澤賢治」との、全編を見渡せば、山川方夫、夢野久作、芥川龍之介、三島由紀夫らとの〈音〉を介した太宰治との関連が示唆されている。さらに本書のキーとなる「青空を写し込む水溜り、水溜りを写し込む青空」という風景の二重性とそこから聴こえてくる〈音〉に触発されつつ書評子が思い出していたのは「文学こそが、ヨルダンへの途上、井戸に落ちて死んだ名も知れない難民の子どもが、井戸の底から最期に目にした七月の空の青さを語るだろう」というアラブ文学研究者の岡真理が「戦争」の対義語としての文学」（『思想』二〇〇六年九月号）で述べていた一節であった。大國も本書の末尾に添え書きとして奇しくも「武器を楽器に持ち替えて」の一言を記している。水底から空の青さを語る文学の可能性を決して手放そうとしないこと。太宰作品と交錯する文学の可能性を呈示する本著がさらに多くの人の手に渡ることを祈っている。